清河八郎

「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査後半同行記

1

庄内町清川出身の幕末の志士、清河八郎は1855（安政2）年、母を連れて全国を旅行し、旅日記「西遊草」を書いた。東京のNPO法人「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）は、その県内ルートを「西遊草の道」と名付けて踏査。8月に清川から鶴岡市中心部、湯田川などを経て新潟県境までを訪ねたのに続き、今月、福島県境から旧板谷街道、羽州街道などをたどり清川まで、日記の記述に沿って検証した。以下は踏査後半の同行記。

（文＝鶴岡支社・伊藤哲哉、写真＝同・色摩高幸）

板谷街道から上杉領へ　石畳、落ち葉に埋もれ

「西遊草」は、清河八郎が母の亀代を清川から伊勢参りに連れて行き、厳島神社（広島県）や錦帯橋（山口県）まで足を伸ばした際の道中記。帰路は江戸に1カ月ほど滞在し、日光（栃木県）、福島を経由して米沢から本県内陸部を北上した。春に出発した清川へ戻ったのは秋も深まったころで、5カ月半もの大旅行となった。日記は母が老後に読んで楽しめるように、また、弟や妹が伊勢参りをする際の参考になるように各地の風物、風俗などを筆まめにつづっている。

八郎親子は、下男の真吉と、八郎の同志で江戸から同行した安積五郎を伴い、板谷街道を通って上杉領に入った。当初は桑折（福島県）、七ケ宿（宮城県）を経て上山に入る予定だったが、1809（文化6）年に七ケ宿で庄内藩士が宿の主人を無礼討ちにして同藩と仙台藩が争ったことなどもあり、母を連れた旅で無用のトラブルを避けるため板谷越えをしたらしい。

江戸時代、米沢と福島の往来は、現在のJR奥羽本線に沿って板谷峠を越える板谷街道（福島街道）が主で、上杉氏の参勤交代やコメの輸送にも使われた。板谷（米沢市）は宿場として栄え、藩主が泊まる「板谷御殿」もあった。

「西遊草」（東洋文庫、小山松勝一郎編訳）には「李平（福島市）の本陣で休み、板谷に帰る牛を雇う」とある。馬でなく牛を使って国境を越えたようだ。

八郎は板谷の関所について「どこでも運上（うんじゅ＝雑税）を課して旅行者から銭をむさぼるのに、米沢藩ばかりは決して一銭もむさぼらない」「天下の旅人をして自分の国を通行させるという孟子の教えによると思われた」と感心している。

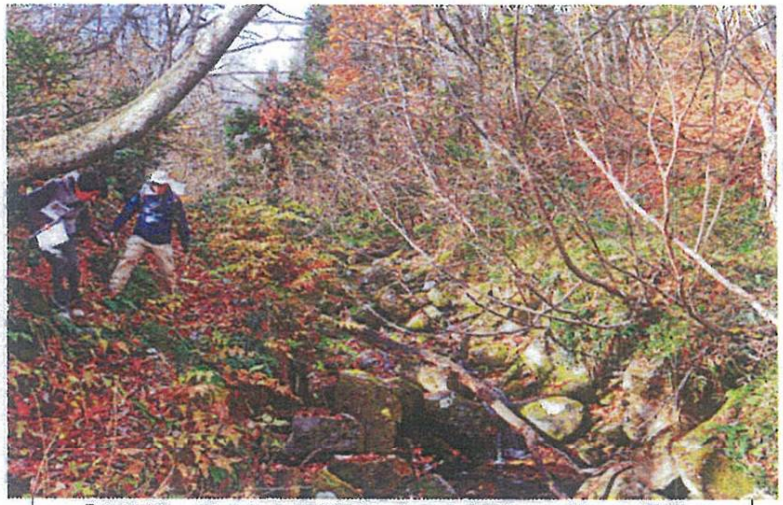
市立米沢図書館で郷土資料を担当する青木昭博副主幹は「こうした印象を与えた背景には上杉鷹山の藩政改革がある」と解説する。

「米沢市史」によると、米沢藩は国境の番所と城下の判所で通行許可証である通判を出し、人の往来や荷物の流通を統制した。藩政改革の一環として1775（安永4）年、領内を出入りする商人の活動を盛んにしようと三の丸にあった判所を城下町の大町に移し、夜中でも対応するように改めた。また、宿屋で行われていた通判の受け渡しを直接判所で行い、過分な料金を取られないようにした。

「西遊草の道」踏査後半は板谷からスタート。矢口代表ら「まちネット」の2人が実施した。明治に入って数キロ離れた栗子峠を通る「万世大路」が整備されると、板谷街道は廃れた。番所跡などを探してみたものの宿場の面影はなかった。

地区会長の鈴木吉雄さん（73）によると、板谷は戦後、白土（ろう石クレー）の鉱山で活気にあふれ、最盛期には1200戸あったが、現在は35戸に減った。「街道の名残なのか昔は集落内の道が石畳だった。近くの山道には今も石畳が残っている。自分の子どもが小さいころ遠足で通った」と鈴木さんは振り返る。

踏査隊は板谷から県道を大沢方面に向かい、JR板谷駅からしばらく坂を上った山神橋付近で、旧街道の入り口を示す標柱を見つけた。そこから山道に入り、落ち葉に埋もれて分かりにくくなっている石畳を確認。さらに進むと、沢沿いの美しい風景に出合った。「沢があり、石畳があり、緑がある。もう少し整備すれば素晴らしい散策スポットになる」と矢口さんは目を見張った。



「山神橋」近くから旧街道に入ると沢沿いの美しい風景に出合った　＝米沢市

清河八郎　1830（天保元）年生まれ。清川村（庄内町清川）の裕福な酒造家の長男。16歳で学者を志して家出し、江戸で学問と剣の修業を積んで塾を開いた。その後、尊王攘夷（じょうい）の急進派と「虎尾の会」を結成。奉行所の手先とみられる男を斬って逃亡生活に入った。潜伏しながら諸国の志士を結び付けたが、薩摩の尊攘過激派が薩摩藩士に討たれた寺田屋事件で挫折した。63（文久3）年には幕府に働き掛け浪士組を組織。同年暗殺された。浪士組は新徴組、新選組となった。

山形新聞
2012年11月24日
に掲載！

清河八郎

「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査後半同行記

2

板谷峠―大沢―米沢　かやぶき、宿場の面影

板谷峠（755㍍）は福島県境ではなく、米沢市板谷から見て県境の反対側にある。1855（安政2）年秋に清河八郎と母親らの一行が板谷峠を越えた時には、笠が飛ばされそうになるなど風雨で苦労したようだ。八郎の旅日記「西遊草」（東洋文庫）に「（休息所である）旅人助けの家が2軒あり、五色という温泉場も見えた」とある。

この峠は分水界で、東は福島に流れ、西は羽黒川から最上川となる。八郎は、初めは小さな流れが郷里の清川（庄内町）では大河となり、洋々と海に入るとして「孔子がおおせられたように、河の流れのように倦（う）まず勉（ゆる）まず動めてやまないなら成功するだろう」と書いた。

板谷峠を越えた八郎親子は、大沢宿の茶店でキノコなどを煮させて昼食を取った。

「西遊草」の県内ルートを検証する東京のNPO法人「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）の踏査メンバーは、板谷から同市大沢に向かう県道を進んだ。峠を過ぎると、道沿いの川は確かに板谷付近とは逆方向に流れている。変化に富んだ渓流の景色や近隣の山々の紅葉を満喫した。

1980（昭和55）年度の「県歴史の道調査報告書　米沢・板谷街道」によると、大沢宿は江戸時代の最盛期に六十数軒あり、本陣、脇本陣をはじめ旅籠（はたご）や茶屋などが軒を連ねた。

過疎が進み、今の大沢は10軒のみだが、近野ツル子さん（77）方などかやぶき屋根の民家が宿場の面影を残す。「この家はもともと村上屋という旅籠で、両隣も旅籠だった。かやは自分で刈り、職人に毎年少しずつ屋根を直してもらっている」と近野さんは話す。

近野さん方の道路向かいでは、笹木源次さん（66）が畑仕事をしていた。地区外に引っ越したが、笹木さん方は以前この場所にあり、かつては秋田屋という旅籠だった。「L字型の木造の家で、うまやもあった」と懐かしそう。76（昭和51）年に解体したという。

大沢宿を出た八郎は「谷川に沿って下る。山は高く谷は深く、ここを通ずる一本の道の他に道はない。たいそう優れた要害の地と思われた」（「西遊草」）。踏査隊は大沢を出発し、関根を経由して米沢の市街地に入った。

清河八郎は、板谷の宿場に続き米沢城下でも藩政が優れていると記した。藩校興譲館では文武のほか医学も教え、他藩からも集まることや、産物が多彩な点などを挙げている。

「海に遠く山の中の狭い土地だと思っていたが、意外な平地で大そう広い」「城下から赤湯（南陽市）までは碁盤の上を歩くようだ」とも。ルートは違うものの、23年後の1878（明治11）年に新潟県境の十三峠から本県に入った英国人旅行家イザベラ・バードが、置賜盆地を「アジアのアルカディア（桃源郷）」と称賛したことが思い浮かぶような表現だ。

一方で、八郎は米沢城下の町家が「案外みすぼらしい」と指摘したが、豪雪のため重い瓦屋根がなく、かやぶき屋根の家が並んでいたことが、そうした印象を与えたとの見方もある。

清河八郎らの一行は米沢城下を出発して赤湯温泉に泊まり、マツタケを注文して酒を飲んだ。踏査メンバーは米沢藩領内の街道の基点となった米沢市大町の「札の辻（つじ）」跡を確認し、市中心部から赤湯を経て上山市へと北上した。（文＝鶴岡支社・伊藤哲哉、写真＝同・色摩高幸）

米沢市大沢を散策し、晩秋の山村風景を楽しむ踏査メンバー

山形新聞
2012年11月25日
に掲載！

清河八郎

「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査後半同行記

3

米沢―上山―山形

街道筋に残る碑確認

1855（安政2）年に母を連れて全国を旅した清河八郎は、米沢城下から米沢街道を北上し、上山で羽州街道に入った。「まもなく上山にいたる。ここで山中七ケ宿往来と合する」と八郎の旅日記「西遊草」（東洋文庫）にある。

八郎親子の旅の県内ルートを検証する東京のNPO法人「元気・まちネット」の踏査隊は、上山市三本松で旧羽州街道と米沢街道の追分碑を確認した。両街道がトの字型に交わり、地名の通り近くに松がある。

碑の説明板によると、1691（元禄4）年に供養碑が建てられ、後に追分の道標が刻まれた。風化して読みづらいが「右ハよ年さわ　左ハ江とみち」と彫ってあるという。「江とみち」は江戸道で羽州街道を指す。高さ1・7㍍の碑に使った石は相撲取りが背負って来たと伝えられている。

羽州街道は奥州街道の脇街道で、七ケ宿（宮城県）を経て金山峠から本県に入り、上山、山形、新庄、金山を経て秋田県に抜ける。庄内、新庄、山形、上山、秋田、弘前などの各藩が参勤交代に利用した。

八郎親子らの一行は、上山を過ぎると松原村（現山形市）に到着。「坂の上に二軒の茶屋があり、山形城や月山を見渡せ、特に葉山が目立っている」と八郎は書いた。「まちネット」の踏査メンバーがその場所を訪ねたのは夕暮れ時。山形ニュータウン「蔵王みはらしの丘」の一角に、石畳の道や古井戸など旧街道の雰囲気を再現したスペースがある。そこから眼下に山形市街の夜景がうっすらと浮かび上がり、遠く葉山を望むことができた。

「西遊草」には当時の山形について、街並みが長く商業が盛んなこと、城が広くて藩主が維持に苦労していること、マツタケが千歳山の名産であることなどが記されている。博徒の親分同士の争いにも触れており、現代語版（東洋文庫）を編訳した小山松勝一郎さんは「庶民の歴史を探る一助となるであろう」と解説している。

八郎親子は山形で「旅篭町の柴田屋」に泊まった。宿があった所には現在、テナントビルが立っている。踏査隊は、そのビルやJR山形駅前の飲食店「伝七」を経営する柴田進さん（64）を店に訪ねた。

柴田さんは旅館にあった「旅館柴田屋傳七」「庄内御荷物宿」「山形縣麗指定旅館」の古い看板を見せてくれた。

「柴田屋は1997年に廃業したが、350年の歴史があると聞いていた。武士だけでなく出羽三山参りの行者なども泊まったようだ」と話す。

明治以降も多くの著名人が宿泊した。日本の資本主義の基礎を築いたとされる渋沢栄一の書が残っているほか、戦時中にはコメディアンの古川ロッパが泊まり、わらじをあげたらふすまに絵を描いてくれたというエピソードも。戦後はプロレスラーの定宿になり、ジャイアント馬場さんやアントニオ猪木さんも利用したという。

「まちネット」の踏査メンバーは、かつて街道筋のにぎわいの中心だった市内十日町で、明治初期に取り払われた碑を惜しんで1955（昭和30）年に建てられた「十日市跡」の石碑を確認。霞城公園の二の丸東大手門や石積みの水路が再整備された「水の町屋七日町御殿堰（ぜき）」に足を運び、天童方面へと向かった。

（文＝鶴岡支社・伊藤哲哉、写真＝同・色摩高幸）

石積みの水路が再整備され新名所となっている「水の町屋七日町御殿堰」を訪ねる踏査メンバー　＝山形市

山形新聞
2012年11月26日
に掲載！

清河八郎

「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査後半同行記

4

山形―天童―村山

歴史通じ地域間交流

1855（安政2）年に母の亀代を伴って全国を旅した清河八郎は、清川（庄内町）への帰路、山形城下を出発して羽州街道を北上し、馬見ケ崎川を渡った。八郎は旅日記「西遊草」（東洋文庫）に、そこから三里（12キロ）歩く天童との間は村々が続いて開けており、右の山間には八郎が少年時代に訪れた名勝の山寺があると書いた。

八郎親子の足跡を検証する東京のNPO法人「元気・まちネット」の踏査隊は、天童市田鶴町の天童陣屋跡を訪ねた。喜太郎稲荷神社と田鶴町公民館の入り口になっている大手門跡に1857（安政4）年の「天童御陣屋絵図」を描いた看板があり、八郎親子が見たのと同時代の陣屋の様子を知ることができる。とはいえ遺構らしいものは残っておらず、天童織田藩主の御殿があった場所にはJR奥羽本線の線路が通っている。

踏査メンバーは「西遊草」に「ご利益日本一の疱瘡（ほうそう＝天然痘）神」とある東根市の若木神社や、「オオカミの多い所」とされた同市六田などを経て、村山市楯岡に入った。

八郎親子は楯岡宿で「江戸屋」に泊まった。「庄内藩の定宿で、私の定宿の中でも特に立派な家である」と八郎は書いた。

江戸屋旅館は300年もの歴史があったが10年ほど前に廃業した。15代目という村川キヨ子さん（89）によると、今は村山郵便局になっている隣家が江戸時代の本陣で、江戸屋は脇本陣だった。

明治以降も著名人が多数宿泊した。「（俳人、歌人の）正岡子規は1893（明治26）年に江戸屋に1泊し、隣の郵便局から松山市のおじに金の無心をする手紙を出した」と村山市文化財保護審議会委員の斎藤義明さん（70）。英国人旅行家イザベラ・バードや画家の高橋由一も泊まったらしい。

キヨ子さんの妹サチ子さん（80）は「戦後間もないころには道路に面した板の間で宿泊客が古着、雛人形などを並べて売っていた。敷地が広く客室は15もあって掃除が大変だった」と振り返る。キヨ子さんは「以前は楯岡に旅館が何軒もあったが、今は一軒もない。街の様子もすっかり変わった」と話す。

清河八郎が暖を取った茶屋跡を確認した踏査隊
＝村山市土生田

清河八郎は楯岡の白鶴山（楯山）を「たいそう美しい」と褒めた。翌朝、江戸屋を出発した八郎親子は、居合神社で知られる同市林崎や金谷を過ぎ、土生田で馬を継ぎ立てた。「土生田から半里進んで左の方に大石田への分かれ道がある。そこの茶店でしばらく休み、たき火でまた身を暖める」（「西遊草」）。

茶屋のあった場所には今月、袖崎まちづくり協議会歴史部会（平山繁部会長）が「清河八郎お休み追分茶屋」の看板を立てた。2009年秋に標柱を設置したが、説明付きの看板に作り直した。

「大石田に向かう道は『へぐり道』と呼ばれ、最上川の河岸につながっていた」と平山部会長。追分には「右秋田　左おおいしだ」と彫られた江戸時代の追分石が置かれていたが、道路整備で撤去され、上下三つに割れた真ん中の部分が残っているという。

歴史部会は09年6月、土生田の別の場所に「イザベラバード・清河八郎　鳥海山眺望の地」の標柱も設置した。清川の住民らが土生田を訪れ、八郎について語り合うなど歴史を通じた地域間交流が生まれている。

（文＝鶴岡支社・伊藤哲哉、写真＝同・色摩高幸）

山形新聞
2012年11月27日
に掲載！

清河八郎

「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査後半同行記

5

猿羽根峠―清水―清川

旧道から最上川の絶景

庄内町清川出身の幕末の志士・清河八郎は猿羽根峠について「最上川を見下ろし、月山や鳥海山をはるかに眺め、いちだんとよい景色である」「ここから望む鳥海山の形は富士山に似ている」と旅日記「西遊草」（東洋文庫）に書いた。「泥土の道だから雨降りの時は人も馬も難儀をする」との記述もある。

八郎が1855（安政2）年、母を連れて全国を旅した際の県内ルートを検証する東京のNPO法人「元気・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）の踏査隊は、村山市から尾花沢市名木沢を経て、舟形町との境にある猿羽根峠に向かった。

踏査当日はあいにくの強い風雨。四輪駆動車で国道13号猿羽根トンネルの南の毒沢から狭く曲がりくねった坂道に入った。2キロ余り進んだ先の駐車場で下車し、石段を上って頂上付近を敵策。上部の「従是（これより）北」が欠けて「新荘領」だけが残る新庄藩境石標を確認した。羽州街道の面影を残す付近の道からは、最上川の雄大な流れを見下ろすことができた。

「西遊草」によると、猿羽根峠を過ぎた八郎親子は羽州街道から舟形街道に入り、長者原（舟形町）を経て清水（大蔵村）に着く。そこで親類筋の海藤嘉右衛門家に泊まった八郎は「わが家に帰ったも同然」と、すっかり安心している。嘉右衛門は村の有力者を集めて酒宴を開き、八郎たちが清水から最上川を下る舟にも同乗した。

舟形街道は羽州街道舟形宿と手向宿（鶴岡市羽黒町）を結ぶ街道。江戸時代、清水から下流は陸路もあったが最上川舟運が主で、河港の清水はにぎわった。清水周辺には旧舟形街道が歴史の道として残されている。踏査メンバーは大蔵村文化財保護委員の熊谷勝保さん(67)＝清水＝の案内で、この道を歩いた。

清水の集落近くの県道沿いに旧街道の入り口を示す標柱が立ち、車も走れる砂利道の脇に昔の街道が通っている。しばらく行くと道沿いに最上川の絶景を見渡せる展望台があり、あずまやも整備されている。その先の下り坂は道を掘り下げて傾斜を緩めており「昔の人が荷車を通すため切り通しにした」と熊谷さん。集落に入ると道分右に「右ひじおり　左ふながた」と刻まれていた。

切り通しになった旧舟形街道を歩く踏査メンバー＝大蔵村

熊谷さんによると、海藤嘉右衛門家は庄内藩の定宿で脇本陣の役割を果たし、士分として帯刀を許された。親類とあって清河八郎の清川の生家との付き合いも深く、八郎の父は清水で俳諧の会を催したという。

海藤家は今はビルに変わった。道の向かい側は本陣だった小屋酒造（小屋和也社長）。同社を訪ねると、庄内藩主や家臣らを迎えた古い宿札が掲げられていた。小屋家には諸大名が宿泊し、幕末から明治にかけては黒田清隆、大久保利通らも泊まった。

清水で舟に乗った八郎らの一行は、本合海（新庄市）、古口（戸沢村）を経て仙人堂で清川からの迎えの舟に乗り換えた。踏査隊は悪天候のため予定していた舟下りを断念したが、八郎が「下り舟が最も難儀する」と書いた清水近くの「天狗（てんぐ）の巻」や「この川筋第一の名滝」と評した「白糸の滝」を土手や対岸から眺め、清川でゴールした。

「元気・まちネット」は清河八郎が学者を目指して家出し、江戸へ向かった県内ルートを「回天の道」と名付け、2009～10年に踏査した。「『西遊草の道』をたどって八郎がますます好きになった」と矢口さん。踏査隊員の佐野千晶「まちネット」理事は「山形には良いものがたくさんある。歴史など視点を決めることでさらに魅力は高まると思う」と話した。

（文＝鶴岡支社・伊藤哲哉、写真＝同・色摩高幸）

＝おわり

山形新聞
2012年11月28日
に掲載！